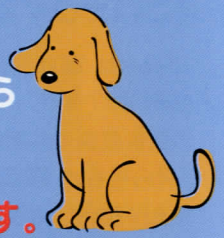
一生を通じてワクチンは必要です！

1歳を過ぎても

ワクチン接種は
毎年忘れずに受けましょう！

おでかけ先や身近な散歩コースでも、伝染病の危険はどこにも有ります。
愛犬を伝染病から守るためにも年1回のワクチン接種をお奨めします。

シニア期を迎えたら



ワクチン接種は
ますます大切になります。

しっかり予防を続けて、恐ろしい伝染病から守ってあげることができました。
「年をとっているから、もうワクチンの必要は無いわね！」ということではありません。
年をとって、内臓の機能が低下することによって免疫力がおとろえてしまうということがあります。
予防できる病気はすべて予防することが大切です。

ワクチン接種時に注意すること

1. 妊娠犬には使用しないでください。
2. 健康犬でないとワクチンは接種できません。
愛犬の体調に気をつけてください。
3. 接種後、しばらくの間はよく様子をみてください。
普段と違った様子が見られたら、当院へご連絡ください。
4. ワクチン接種当日は安静にし、接種後2～3日間は激しい運動やシャンプーは避けてください。
5. ワクチン接種後、充分な免疫が出来るまで（通常約2～3週間）、他の犬との接触を避けてください。
※初めてのワクチン接種の場合、1回では充分な免疫ができないことがあります。

ワクチン接種による副反応について

- ワクチン接種後に熱が出たり、注射部位を痛がったりすることがあります。そのために元気がなくなったり、食欲が落ちてしまうことがありますが、通常は2～3日で回復します。
- まれに、アナフィラキーショックを起こしたり、じんま疹が出たり、顔が腫れてしまうことがあります。異常がみられたら、すみやかに動物病院に連絡してください。

次回のワクチン接種については、担当の先生とよく相談してください。

ファイザー株式会社

CA0708
HA0102
C00259

Pfizer

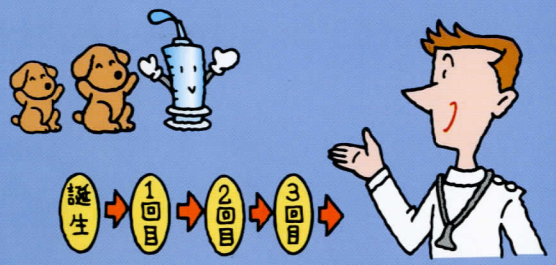
一生、いっしょ。

毎年のワクチン接種が、かけがえのない命を守ります。

子犬、1歳…、シニア、を ワクチンで犬の伝染病から守ります。

子犬をおうちに迎えたら

母親からもらった免疫が無くなる生後2～3ヶ月頃から、子犬が伝染病にかかる危険性が強まります。伝染病は、時には愛犬の命さえもおびやかす恐ろしい病気です。あなたの愛犬を伝染病から守るために、「ワクチン接種による病気の予防」をしましょう。
母親から受けた免疫が無くなる前に、子犬が病気にかかる割合をより低くするためには早い時期でのワクチン接種が必要です。
さらに、確実な予防効果を得るためには、2～3回のワクチンを接種する必要があります。
ワクチンは伝染病予防のためのものですが、100%病気を予防できるものではありません。
しかし、ワクチンを接種した犬は、病気になってしまったとしても、ワクチン接種をしていない犬と比べると、その症状ははるかに軽くすみます。



●犬ジステンパー

高熱、目ヤニ、鼻水が出て、元気や食欲がなくなり、嘔吐や下痢もします。
また、病気が進むと神経系がおかされマヒなどの後遺症が残る場合があります。死亡率の高い病気です。

●犬伝染性肝炎

発熱、腹痛、嘔吐、下痢がみられ、目が白く濁ることもあります。生後1年未満の子犬が感染すると、全く症状を示すことなく突然死することがあります。

●犬アデノウイルス2型感染症（犬伝染性喉頭気管炎）

発熱、食欲不振、クシャミ、鼻水、短い乾いた咳がみられ、肺炎を起こすこともあります。他のウイルスとの混合感染により症状が重くなり、死亡率が高くなる呼吸器病です。

●犬パルボウイルス感染症

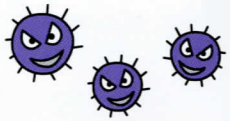
激しい嘔吐、下痢を起こし、食欲がなくなり、急激に衰弱します。
重症になると脱水症状が進み、短時間で死亡することがあります。伝染力が強く、死亡率の高い病気です。

●犬パラインフルエンザウイルス感染症

カゼ症状がみられ、混合感染や二次感染が起こると重症になり死亡することもあります。
伝染性が非常に強い病気です。

●犬レプトスピラ感染症

2種類のタイプがあります。
イクテロヘモラジー型
発熱、嘔吐、黄疸、歯肉からの出血などがみられます。
カニコーラ型
発熱、筋肉痛、脱水症状などが現れ、尿毒症になり2～3日以内に死亡することがあります。人間にも共通の感染症です。



●犬コロナウイルス感染症（CCV）

成犬の場合は、軽度の胃腸炎で済むことが多いのですが、犬パルボウイルスとの混合感染では重症化することも。子犬の場合は、嘔吐と重度の水様性下痢を引き起こします。

●狂犬病

犬、人だけでなくほ乳動物すべてに感染し、発症すればほぼ100%死亡します。最近、海外で感染犬にかまれた日本人が、帰国後、発症・死亡する事例があり、その恐ろしさが再認識されています。